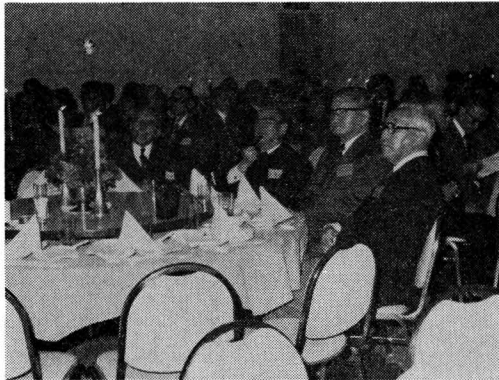


四つの海外登山に成果

—昭和51年度年次晩餐会—



盛況の晩餐会

恒例の昭和五十一年度年次晩餐会は昨年十二月四日午後六時から東京・新宿の京王プラザ・ホテルで二百六十七人の参加者を集めて盛大に行われた。(司会・浜野吉生理事)

恒例の昭和五十一年度年次晩餐会も多数の参加者を見、会の繁栄をよろこぶ旨の挨拶があったあと、会務報告に入った。

現会員数は三千四百十人で、物故者十七人(別掲)が知らされ、参加者一同、御冥福を祈って黙禱を捧げた。

③パミール国際キャンプ参加(原真隊長) コルジュニフスカヤ、コミユニズム各登頂成功。

また秋の叙勲者として勲三等授章の中河与一氏、勲六等の藤島玄氏が伝えられ、出席者の拍手を浴びた。今年度は名誉会員の推挙はなかったが、永年会員として、神津得一郎(会員番号56)、柳沢悟(同957)、佐々保雄(同、969)、額田敏(同976)の四氏が発表され、この日出席された佐々氏が代表して、今西会長から永年会員章が手渡された。

引き続いて、今年度の主要行事報告があり、当会が送り出し、成功を収めた四つの海外登山の報告があった。

①日印合同登山隊(渡辺兵力総隊長) ナンダ・デヴィ東西峰縦走成功。

②日印女子合同登山隊(須田紀子日本側隊長) アビガミン登頂成功。

③パミール国際キャンプ参加(原真隊長) コルジュニフスカヤ、コミユニズム各登頂成功。

山をきれいに コミは持ち帰ろう

「わたしの山岳会入会は十九歳のとき、なくなられた木暮さんと沼井さんの推薦によるものですが、そのまえ、中学三年のとき、時計台(札幌市)の下で、横さんからアイガー・東山稜登はんの幻灯を見

とであります」と結ばれた。

中河与一氏は「昨年の晩餐会は

佐々保雄、渡辺兵力、中河与一の三氏のスピーチに入り、まず、佐々氏が永年会員を代表して謝辞を述べられた。

佐々保雄氏ほかのスピーチ

このあと、新ルーム購入の計画が理事会で検討されていることが明らかにされ、具体化された時点で、資金調達などについての協力要請があった。

④学生部ガルワル・ヒマラヤ登山隊(牧野内昭彦隊長) ドウナギリ登頂成功。



昭和52年(1977年)

1月号(No. 379)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 150円

目次

- 四つの海外登山に成果
—昭和51年度年次晩餐会—(1)
- 注目された「この一本展」
辻村伊助氏の遺稿について
(近藤信行).....(2)
- みなさんお元気ですか
近況をお知らせします.....(2)
- 山を歩く
1500回山行風越山・鬼面山・鬼が城山
(石間信夫).....(4)
- 図書紹介.....(5)
- 山愛の記
エーデルワイスの歌
パミール
明治初期の日本における外国人の
登山活動について(4)
(水野 勉).....(6)
- 会員通信・委員会通信.....(7)~(10)
- 映画会「探検の先駆者たち」
ドゥナギリ北稜からの登頂
アフガニスタンから
上高地山研51年度報告
宝剣岳で雪崩勉強会
藤島玄氏叙勲祝賀会
- 会員動向・ルーム日誌など.....(11)
- カット/松本慎太郎・谷アユ子

せられて強烈な印象を受けた。当時いろいろとスポーツをやる人もあったが、愚直なわたしには登山以外になく、職業もそれに近いもの(地質学)を選び、山にのめり込んでいきました」と、入会当時の模様を語り、五十年を経て「昨年は北大の学生とアリュエーションで二カ月もすごし、その山々に登って参りました」と、同氏の御壮健な近況が報ぜられ、永年会員推薦についての謝辞を表された。

海外登山四隊を代表しては、渡辺兵力氏が立ち、四隊の行動についての概略を説明、二つの男女合同隊については「新しい分野に一步踏み出された」とし、またパミール登山は「諸外国との共同キャンプであり、交流を深め、二つのピークに登頂、高処医学についての成果もあげられた」ことを、学生によるガルワル登山は「学生独力で計画を進め、全員が登頂する」などのそれぞれの成果を指摘、最後に「会の長い歴史のなかで、外国の人と大きな登山を若い人たちが伸び伸びとすることができ、しかも幅広い活動から、それぞれの特徴ある成果をあげることができたのは大変よろこばしいこととであります」と結ばれた。

ちょうどその日に足の手術をしていて出席できなかった」とことわりの言葉があつて山との結びつきに入り「わたしは晩学で、五十七歳のときから登りだし、好きになりました。若いときは病気がかりしていましたが、いまは健康で、その意味で山は私にとってありがたいところなんですよ。いい空気があり、それが人間を蘇生させると思われます」と、コーカサス、南米の高所の人々、津田青楓さんを引き合いに出され、「今後山に親しみ、登山をよるこびたいと思っています」と登山意欲のほどをも御披露された。

最後に横有恒氏の音頭で乾杯、中国料理を前にして歓談した。
(片山幸平)

注目された

「この一本展」

年次晩餐会の折におこなわれた「この一本展」には左記の各氏出品のものが展示された。今号ではそのうちから、辻村伊助氏の遺稿(写真参照)を紹介する。なお他の出品については、出品各氏の解説を次号から順次掲載、ご紹介する予定。

・望月達夫氏出品「一枚の写真」
・水野勉氏出品「Himalaya. Ca-shuriano」

▽50年の年次晩餐会以後の物故者(敬称略)

山田 力 951 (49年6月19日) 50年晩餐会後判明、小林義正 1378 (50・12・14)、石川絃一 6948 (51・1・27)、古川房雄 7634 (2・5)、伊藤秀五郎 1087 名誉会員 (2・22)、藤田佳宏 4521 (3・27)、細井孝雄 6628 (4・4)、城谷一誠 1961 (4・26)、青木昭三 5161 (4・27)、関田美智子 5932 (5・3)、阿岸充穂 5963 (6・4)、日高信六郎 142 名誉会員 (6・18)、府川 裕 3382 (6・22)、広沢伝一 6342 (8・23)、藤島敏男 710 名誉会員 (9・9)、武井栄四郎 7768 (10・3)、酒戸弥二郎 1487 (10・5)。

・神原忠夫氏出品「佐藤達夫歌集 Ⅱ 景色」
・亀田与三次氏出品「富士山鳥界 一班」
・吉沢一郎氏出品「K2 関係資料」
・石川治郎氏出品「Der Alpinismus in Bildern」
・辻村伊助氏の遺稿について

近藤 信行

辻村伊助、逝いて五十三年。大正十二年九月一日、箱根湯本にあ

みなさんお元気ですか 近況をお知らせします

昭和五十一年度年次晩餐会に出席出来なかった方々からは、出欠通知とともに近況をお知らせいただきました。ここにその中から、会員番号の若い方々のものを中心として、ご紹介いたします。(氏名の次の数字は会員番号、順不同)

しく。

*小島 栄 (四五〇)

毎日元気。休日に六甲山系の低い小丘へハイキングがてら登ってダイゴ味を味つてゐます。今年米寿で、会員中の最長年齢かな。

*額田 敏 (九七六)

老齢なお健康、山を想い、野を歩く。日々これ好日。

*柳澤 悟 (九五七)

御招待厚く御礼申し上げます。

私事、近頃血圧が不安定にて寒さに向いて夜間外出が不安のため残念ながら出席できません。おゆるし下さい。就きましては御恵与の永年会員章は甚だ勝手ながらお手数ながら御郵送下さればまことに幸です。

*岩永信雄 (六二八)

高血圧症静療中にて夜間外出は禁止されて居るので残念ながら欠席致します。諸君にくれぐれも宜敷願います。

*加納一郎 (六三四)

夜の外出をとめられていますので、残念ながら失礼いたします。今西さんはじめ皆様による



*神津得一郎 (五六)

この度は永年会員章附与の御通知いただき有難う存じます。生憎と小生このところ腰を痛めて居って当日出席出来ません。残念乍らよろしく願ひ上げます。

*三日月直之 (一六五四)

日本山岳会に入会して、早くも四十数年が過ぎました。穂高や伯耆大山北壁から、北ボルネオのキナバル、ジャバのメラピ、南ベトナムのランピアアンと、東南アジアの山旅を懐かしんでゐます。六十五歳を過ぎて山行も叶はず、書齋での山想に明け暮れてゐます。青年時代に十年間を生活した台湾の山岳の

中で、大霸關山の岩壁を今一度見たいものと、台湾旅行を夢見て計画してゐます。

*田辺主計 (一四三〇)

まづ、何よりも皆さんの御健康をねがっております。視力、氣力がおとろへ、残念ですが、むかし山歩きをしたせいか、今も二本足で散歩(三步でなく三、四千歩)をしてコーヒードへ行ったりは、しております。(日齢—二九、八二〇日)

*水野祥太郎 (一二五九)

五日、広島で会合あり、東奔西走は年令から控えます。日々多忙をきわめ、おかげで元気なようです。皆さんによろしく。

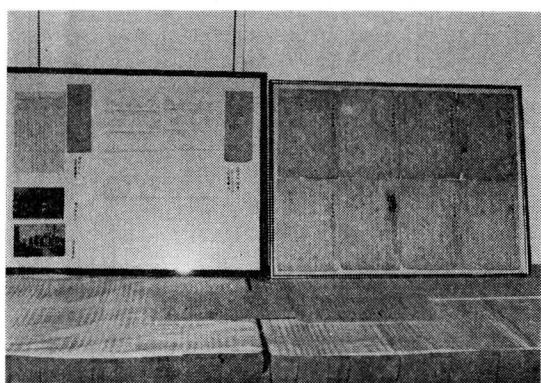
*角田吉夫 (一〇四六)

御盛會を祈つてます。小生数年前より高血圧症のところ、今春心筋梗塞にて倒れ、約一ヶ月治療、未だ体力に自信なく自重しておりますので欠席いたします。

*武村市太郎 (一〇三一)

今年から職を離れて自適の生活をして居りますが、毎月一二回は長野カントリーか菅平峰





年次晩餐会場に展示された
辻村伊助の草稿と書簡

の詩人であり、また
《純情の人》としてし
たしまれた辻村伊助を
知る上で、好個の資料
であろう。

*

*

*

った彼が、山崩れのため不慮の死
をとげたことは、いたましい事件
であった。その災害現場から、遺
稿『続スويس日記』が発掘され
たことは、あまりにも有名な話だ
が、その原稿は、高野鷹蔵氏の寄
贈により、日本山岳会ルームに貴
重品として保存されている。小島
鳥水、武田久吉、茨木猪之吉氏ら
の添書きとともに、佐藤久一朗氏
作製の文箱におさめられている。
昭和五十一年六月、図書委員会
では高野鷹蔵氏旧蔵の辻村伊助資
料を購入したが、そのなかで、
『スويس日記』の草稿その他、
約四十枚があった。泥にまみれて
汚損のはげしいものだが、これは
あきらかに家屋倒壊の跡から掘り

出されたものであることを確認す
ることができた。そこにはスイス
での登山紀行および高山植物にか
んするエッセイがあり、ここに展
示したのは、冒頭の八枚である。
自然と人間をすなおに見つめてき
た彼は、生前の著作においても、
ロマンチズムとリアリズムをやわ
らかに融合させた、すぐれた文体
をのこしたが、この一連の草稿
は、彼がいかに推敲をかかすてい
たかを、如実にしめしている。
また辻村伊助書簡の一部を展示
した。そのひとつ、四枚つづきの
書簡は、箱根における一家の近況
を高野氏につたえたもので、封筒
の表には、大正十二年九月一日の
消印がある。高野氏は封筒に裏書
きして、大震災のさな
かにめぐりめぐって伊
丹で受けとった旨を書
き、絶筆と注記してい
る。九月一日の朝、す
なわち死の二、三時間
まえに投函されたもの
と考えられる。
科学者であり、情熱
の詩人であり、また
《純情の人》としてし
たしまれた辻村伊助を
知る上で、好個の資料
であろう。

の原ゴルフに出かけてゴルフを
楽しみながら日本アルプスから
八ヶ岳、立科、志賀高原の山々
をながめて喜んでいきます。

* 岡田喜一（一九三三）

年次晩餐会の御案内、有りが
たく存じます。出席いたしたい
のですが、遠隔の地に居るとの
最近突発的の用事が多く、今か
らお約束いたしかねます。

一、日本山岳史上に多大の貢
献を残された我々の大先輩の写
真、筆蹟など、どの程度集まっ
て居ますか。こういう方々の偉
業を後輩の方々に知って戴きた
め、せめてコピーでも集めて置
きたいものです。小生の所にも
少しあります。

一、山岳ではないが、極地の
探検家のものも集めてみたいも
のです。小生の所には白瀬老中
尉筆の額、写真、筆蹟などあり
サインでしたらバード、ノビ
レ、エッケナー、ウィーゼ、シ
ュミットなどあります。晩餐会
の御盛會を祈ります。会長によ
ろしく、吉沢一郎君にもよろし
く。

* 中島道郎（四六四四）



これまでも一度も出席したこ
とはありませんが、国鉄料金が
こども上ってはおとも一夜の飲
み食いのためだけ上京すること
は出来ません。この九月、イタ
リア、アンコナ市で開かれた国
際高所医学会議に出席しまし
た。日本からは京都の斎藤惇生
君と二人だけでした。

* 村上金吾（三八三四）

昭和四十五年十月、心筋こう
そく、心不全などで入院二回で
三ヶ月半ほど。でもその後近所
の五葉山は三回（通計二三回）
秋田駒二回、早地峰、栗駒各一
回、岩木山、八幡平などへもゆ
きました。そのほか、地方低地
の山を歩きまわっています。

* 岸田権二（三三〇四）

いつも御案内いただいて有難
うございます。毎年一度出席を
と思いがたが又今年も先約あり
残念乍ら欠席せざるを得なくな
りました。最近家の用事と暇
を見てはゴルフと山行と、時々
海外に出かけています。山行も
シーズンをはづして人の少い時
に行くこともむづかしくなりま
した。御出席の先輩諸兄並びに
会員の皆様によろしく御伝声下
さい。

* 井手貴夫（二二七九）

今年は夏に定山溪の奥の小さ
な沢歩きをしただけで、あまり
歩けなくて残念でした。先日、



京都の小谷さんを訪ねて、素晴
らしい山岳図書の蒐集に驚嘆し
ました。冬にはまたスキーに出
かけるのを楽しみにしています
* 片山英一（二二二二）
残念乍ら出席出来ません。ご
盛會を祈ります。

毎月一〜二回、近くの低い山
々を歩いています。十月十九日
「藍綬褒章」を受章、喜んでい
ます。

* 田中栄蔵（二一五三）

やっと勤めから解放された。
年金山の登り口でマゴマゴ。A
CRでゴトウィン・オースチン
の業績をしらべています。ヒマ
ラヤ誌の残巻を友としてつきあ
うことにします。皆様の御健勝
を念じつつ。

* 松村 高（一八六八）

あと二ヵ月で満八十一歳を迎
えますが、毎日曜祭日には六七
時間の山歩きをやって居ります
が、たいして疲れも致しません
から、当分は若い連中と一緒に
歩けそうです。十月二日の燕山
荘五十五年祝に燕から常念のあ
たりの秋を楽しんで来しました。

山を歩く

千五百回山行

風越山・鬼面山・鬼ヶ城山

石間 信夫

昭和五十一年一月二日(晴)

急行伊那一号で飯田へ着いたのが昼少し前、先発の牧野、水野両氏と落合って風越山へ登る。

風越山は標高一五三五メートル、中腹に虚空蔵菩薩、頂上直下に白山神社の祀られた、飯田西郊の信仰の山である。

二等三角点の置かれたゆるやかな頂上は、大きな闊葉樹が茂って眺望は得られないが、天然記念物のベニマンサクが自生した中腹からは、一面に笹の生えた明るく裸山で、足下にひろがる伊那谷を隔てて、仙丈岳から白峰三山、塩見岳、荒川岳、赤石岳、聖岳、上河内岳、寸又連山へとつづく南アルプスが延々と東の空を限っている。

短かい冬の日足に追われるような忙がしい半日山行であったが、たそがれの空に桃色に染った雪の南アルプスは、まことに印象深いものであった。

夜は鬼面山の西麓、喬木村大島の内山さんという大きな家に泊めて頂き、炭火のコタツに入りながらゆっくり正月の酒を酌み交わす。

一月三日(晴―曇)

午前七時少し前出発、アイスフールをかけた砂防堰堤の所で車を降り、せまい沢沿いを右岸左岸と渡りかえして急な山腹へとりつく。

この取付点と中腹の横みちから分れるところがちょっとわかりにくい、後は迷うことのない一本みちである。

一五〇〇メートル位から急に深くなった笹を分け分け、南峰南よりの露岩へ出ると、眺望は明るく開け、南に近く氏乗山、東、奥茶臼、尾高、御池山稜の上に、塩見岳、荒川岳、赤石岳、大沢岳、聖岳、上河内岳、寸又連山が真白な姿をのり出している。

黒木の茂った南峰を過ぎると、右側は黒木、左側はすっかり伐採された雪尾根になり、ほんの三分ばかりで鬼面山の頂上へ出る。一等三角点の置かれた一八八九メートルの頂上は、東側は黒木が茂って奥茶臼、赤石、荒川を垣間見るに過ぎないが、西側は伊那谷へ向って遮るものもなく開け、恵那山から次第に盛り上がる中央アルプスが延々と西の空を限り、その

表 1 高度別登頂数

標 高	山	峠
3700メートル台	1	0
3100 "	10	0
3000 "	17	1
2900 "	17	0
2800 "	44	0
2700 "	35	2
2600 "	27	2
2500 "	22	5
2400 "	23	7
2300 "	23	5
2200 "	20	4
2100 "	26	7
2000 "	32	8
1900 "	48	10
1800 "	30	11
1700 "	50	15
1600 "	47	12
1500 "	41	24
1400 "	40	21
1300 "	48	21
1200 "	38	18
1100 "	40	26
1000 "	55	35
900 "	37	33
700 "	40	52
600 "	45	26
500 "	53	30
400 "	58	39
300 "	50	32
200 "	31	18
100 "	27	10
計	1128	502

表 2 所在地別登頂数

所 在 地	山	峠	所 在 地	山	峠	所 在 地	山	峠
静岡	317	123	千葉	4	1	徳島	3	2
静岡・山梨	34	20	岐阜	11	7	愛媛	2	0
静岡・長野	39	5	岐阜・富山	2	2	熊本	1	1
静岡・神奈川	8	11	岐阜・石川	1	0	長崎	1	1
静岡・愛知	9	12	岐阜・滋賀	0	1			
静岡・山梨・長野	1	0	富山	18	12	計	1128	502
静岡・山梨・神奈川	1	0	富山・新潟	3	0			
山梨	117	62	新潟	17	3			
山梨・長野	18	3	福島	8	4			
山梨・埼玉	11	3	宮城	3	0			
山梨・東京	4	1	山形	6	0			
山梨・神奈川	4	3	岩手	7	1			
山梨・長野・埼玉	1	0	岩手・宮城・秋田	1	0			
長野	108	50	秋田・青森	1	0			
長野・岐阜	22	8	青森	1	3			
長野・富山	20	2	福井	1	1			
長野・群馬	18	13	三重	2	0			
長野・埼玉	7	3	三重・滋賀	4	6			
長野・新潟	2	1	三重・奈良	4	1			
長野・愛知	1	1	滋賀	30	19			
愛知	21	13	滋賀・京都	1	2			
神奈川	32	8	京都	32	23			
神奈川・東京	1	2	奈良	40	10			
東京	15	5	奈良・和歌山	2	1			
東京・埼玉	9	1	奈良・大阪	4	10			
埼玉	9	10	和歌山	7	4			
埼玉・群馬	1	1	和歌山・大阪	2	0			
群馬	15	11	大阪	2	0			
群馬・新潟	12	3	兵庫	37	6			
群馬・栃木	3	1	兵庫・鳥取	1	1			
栃木	12	3	鳥取	1	0			
栃木・茨城・福島	1	0	岡山	1	0			
茨城	2	1	香川	2	0			

(注)

一、回数は家を出てから家へ帰るまでを一回とし、日帰りも数日にわたる場合も、それぞれ一回と数えた。

二、同じ山は、何回登っても一つと数え

三、所在地が連記してゐるのは、都府県の境界にある山の意である。

四、日本以外の山は数に入っていない。

(注)
一、回数は家を出てから家へ帰るまでを一回とし、日帰りも数日にわたる場合も、それぞれ一回と数えた。
二、同じ山は、何回登っても一つと数え
三、所在地が連記してあるのは、都府県
の境界にある山の意である。
四、日本以外の山は数に入っていない。

右邊か遠く、穂高、槍、後立山、美ヶ原が白い小さい頭を連ねている。

風もなく、防寒衣も手袋もいらないような静かな頂上で、写真を写したり昼飯を食べたりしながらゆっくり休んでいると、空は次第にとろんで日の光もにぶくなってきたので、滞頂一時間半ばかりで頂上を辞し、往路をそのまま引きかえす。

一月四日(小雨―曇―晴)

夜半過ぎにかなり激しい雨の音を聞いたので、今日は駄目だろうとあきらめていたが、朝起きて見ると、雨はほんの小降りになって雲も切れてきたので、行けるところまで行って見ようと、八時頃家を出る。

いったん天竜川の畔へ出て小川谷へ入り、上氏乗の部落から左の谷へ入ったところに車を止めて、鬼ヶ城山へ向う。

右岸から左岸へ渡って菅林小屋を過ぎると、径は熊捕りの檻のところまで消えてしまったので、恐ろしく急な支稜へとりつき、雨に濡れたボサと露岩に悩まされながら強引に頂上へ出る。

数本の大きな松の下に小さな社の祀られた一四七三メートルの頂上は、東へ向ってスパッと切れ落ちていたが、程近い氏乗山も鬼面山も白い霧にとざされている。

帰路は正常の登山路に従って菅林小屋の裏手へ降り、飯田から新

野、平岡、遠山川、和田、ヒョー越、水窪を通過して夜遅く帰宅する。

鬼ヶ城山という山名の由来は、麓のどこで聞いてもわからないが、頂上をめぐる岩壁から、鬼の棲むところとしてつけられたのであろう。

この山行が、大正十五年八月小学五年生の時、父と兄に連れられて富士山へ登ってから、ちょうど一五〇〇回目の山である。

この間これといって目ぼしい山へは登っていないが、次の目標二〇〇〇回を目指すには、余命もちそうもないので、一応一五〇〇回を区切りとして、登った山を数えて見ることとした。別表の1は高度別登頂数であり、表2はそれを所在地別に分類したものである。

次に一五〇〇回山行を達成できた主な要因を考えて見ると、一、健康に恵まれ病氣らしい病気をしたことがないこと。

二、約三分の二が単独行であるが、よい山仲間に出会ったこと

三、住地の立地条件がよく、昼から一〇〇〇メートルの山、日帰りで二〇〇〇メートルの山へ登れるという、恵まれた環境に住んでいること。

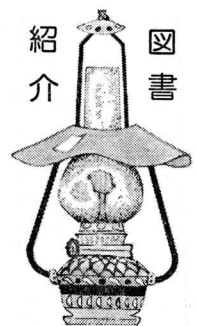
四、天候にかまわず、よほどの風雨でもない限り、雨の日も山へ出かけたこと。

著者の随想集はこれで何冊目になるだろうか。忘れ得ぬ人々以下、山と人生、山・昔と今、四季の移ろい、外国の山々の五章に分け著者の登山人生六十年にちなんだ書きおろしである。それだけに内容もまとまっており、山と人の結びつきに焦点の置かれた第一、第二章などと共に興味深く読まれる。秩父宮殿下、松方三郎、尾崎喜八、柳田國男、深田久弥、さらに古い小島鳥水、田部重治など、すでに鬼籍に入った大岳人とかかわりあいが著者の暖かい眼を通して生き生きと描かれている。文章もまことに若さに溢れており、うるおいがある。

ただ、カール・ブッセの詩がやたらに出てきたり、大正十二年女性初の穂高縦走といった言葉が何度目にとまるのは気になったし、それから人さまのことはあまりいえないのだが、校正ミスではなく原稿ミスではないかと思われるものが、別に気を付けて読んだわけではないが若干眼についた。たとえば、18ページ前穂高からは天狗のころから、81ページ蟬隆は播隆、98ページ瑞籬山は瑞籬山、106ページ三井貴子は井本、186ページアコンカグアは、キリマンジャロ、186ページ後藤薫子は薫子、282ページ1935年マナスルは1953年、といった具合である。

山の愛

村井米子著



度目にとまるのは気になったし、それから人さまのことはあまりいえないのだが、校正ミスではなく原稿ミスではないかと思われるものが、別に気を付けて読んだわけではないが若干眼についた。たとえば、18ページ前穂高からは天狗のころから、81ページ蟬隆は播隆、98ページ瑞籬山は瑞籬山、106ページ三井貴子は井本、186ページアコンカグアは、キリマンジャロ、186ページ後藤薫子は薫子、282ページ1935年マナスルは1953年、といった具合である。

どうも大変失礼なことを書き並べて恐縮だが、この本は、こういつたミスとは別に関係ない内容であり、ことに心を打たれるのは、長年にわたる著者の自然保護に対する情熱で、ただ頭の下がる思いである。

昭和五十一年八月十五日読売新聞社刊、三百ページ、九百円。(山崎安治)

エーデルワイスの詩

坂倉登喜子著

著者は、永年にわたってエーデルワイス(ウスユキソウ)を愛してきた。将来も愛し続けるとい

う。本書は、その折にふれての行動や感懐を綴ったものである。

夏の谷川岳に初めて登った時、ホソバヒナウスユキソウに出合っ

て、その魅力の擒となった著者は、しだいにエーデルワイスへの関心を深めていく。ついに一九七五年に、その花を訪ねてランタン谷への旅をこころみる。

「ヒマラヤのエーデルワイスを求めて」の一文は、花を求める女性のひたむきなよるこびが、慎ましい筆致で余す所なく語られていて、興味ある紀行である。

この旅は著者の人柄と、メンバ

ーの人々の和合が大きな因となっているのだが、しかもどこどころにバラ・サープの貫録が顔を覗かせていて、微笑ましくなる。

著者はこの文の最後に「いつの日にかまた訪れる日まで、清く、優しく、美しく、また咲き続けて欲しい。私は、エーデルワイスの夢を、まだこれからいつまでも追いつけていく」と述べている。

「エーデルワイス雑記」には、出生地別のそれや、女性ばかりの山の会にその名を採ったことや、身の廻りの小物に、その花をあしらった品を集めたことが記してあって、執心の程を偲ばせる。このような点も、いかにも女性らしい感があり、ここまで徹底すれば、一つの花を愛するものも張り合ひのあることであろう。

したがって、著者の山行は、いわば花の旅である。「あの山、こ

「山と峠と私」とは、奥秩父や、奥武蔵や、新緑の徳本峠や、その他数篇があるが、やはり著者が若い頃から好んで歩いた奥武蔵に佳品がある。たとえば、登り下り僅か一時間の豆口峠の「山鳥が飛び出す羽音にどきっとするほどの静かな、木洩れ陽のゆらぐ染な

る。この心の広さ、面倒見のよさが、一つの山の会を司っていく源と言えるであろう。

本書には、故山下一夫氏作の、エーデルワイスの図版三枚が挿入されているが、どれも見事で故人の草花への造詣が、錦上花を添えている。謝妄評。

一九七六年十月、茗溪堂刊。
A5判、三二八頁、価二四〇〇円

（川崎精雄）

この登山事績についても、きりきりとも明確に述べているのは、小島鳥水であるが、かれはそれを何を根拠にして述べているかが、いまのところわからないのである。

鳥水は「アルピニストの手記」の中で次のように書いている。

ガウランドは、明治十一年七月二十八日に、飛驒山脈の槍ヶ岳へ、外人としての第一登山を成就している。明治十三年の夏には、立山、爺が岳、五六岳、明治二十一年には乗鞍岳、木曾御岳を登っている。

この鳥水の記述が少し疑わしいからである。とい

ウォルター・ウェストンは、王立地学協会々誌「ジオグラフィカル・ジャーナル」第七巻に、「日本アルプスの探検——一八九一年〜一八九四年」という報告を掲載している。これは一八九五年十二月に、地学協会のルームで報告されたもので、その報告後、デイスカッションが行われた。そのときの出席者が、ガウランドとミルンであった。このデイスカッションで、ガウランドが日本の山、特にその鉱山資源について話をしているのである。その中で、かれは、自分の登山事績にふれまた日本の山岳全体についても概説している。

それによると、ガウランドは一八七三年に、仲間のエドワード・ディロンとともに、飛驒山脈の南部を探ろうとして出発したが、その年は御岳へ

内容は、四章に分れている。第一章はパミールの概念として、主として地理地形を扱っている。第二章はパミール探検史で、古代から近代までの探検を扱っている。第三章が一九七四年のレーニン峰登頂記である。第四章は資料として今後のパミール遠征を志すものに参考となる事項が記されている。また最後にはパミールの参考文献が載っていて、親切である。巻頭には多くの美しいカラー写真が載っていて楽しい本である。パミールに興味を抱くものとしては、第二章の探検史をもう少し詳細にしてほしかったと思う。ロシア語文献を容易に入手できない

現状では痛切にそう感じる。「あとがき」で「より深い個々の記述については、次の機会に譲ることにした」と書かれているので、より詳細なパミール探検史を期待してよいだろう。更に、参考文献の中にロシア語以外の外国語による文献も、ウッド以外にもかなりあると思われるので、掲載していただければ、より便利なものになったと思う。

ベースボール・マガジン社刊、A5版二〇四ページ、写真四八ページ、一九七六年六月発行、二五〇〇円。

(水野 勉)

会員通信・委員会通信

映画会
探検の先蹤者たち
——珍しい記録フィルム——

「探検の先蹤者たち」の映画が十二月七日、東京の全電通労働会館ホールで行われた。副題として「幻の記録フィルムから」が示す通り、長い間ほこりにまみれていた「英第三次エベレスト登山隊」(一九二四年)と「積雪期北アルプス初縦走」(大正十三年)の記

録映画で、このフィルムが持つ貴重さと同時に、英、日が期せずして同じ年にそれぞれの登山を行っていたわけで、両国の登山レベルの比較を目のあたりにし、観衆に深い感銘を与えた。このほか上映された「シルクロード」は詩情豊かなベルシャ帝国をほうふつとさせ、また「ドルージバ峰」は一九六五年のソ連ドルージバ登頂記録で、天山山脈の高峰群と大氷河の詳細を見ることができた。

「第三次エベレスト登山」の映画の解説にあたった三田幸夫氏によると、同氏がインド滞在を終えて帰国したとき、このフィルムがイギリスで発売されていることを

を登っただけにとどまった。二年後、一八七五年年には、北部に向かい、立山に登り、焼山に登った。その後、次から次へと槍ガ岳、爺ガ岳、五六岳、乗鞍岳などを登った。

これによれば、鳥水のいう、立山は明治十三年、御岳は明治二十一年というのは誤りである。疑う余地はない。また乗鞍岳を明治二十一年というのも、例の「日本旅行案内」の初版(一八八一年発行)に乗鞍岳登山記事が掲載されていることから、明らかに誤りであろう。ガウランド自身もこのG・Jの記事の中で、乗鞍岳を最初に登ったといっているからである。また、爺ガ岳の次の五六岳について、鳥水は何にもふれていないが、五六岳とは何であるか、それだけではわからない。これも「日本旅行案内」初版、第二版をみればすぐわかる。ゴロクダケの登山記事をよんでも、針ノ木峠から左へ入ってすぐの山であるから蓮華岳のことだとわかるが、竜川谷をさかのぼる途中にみえる山々の箇所、Range-dake or Gorokuと書いているのをみてもすぐわかる。蓮華岳すなわちゴロクである。

ここまでは明確なのであるが、これからはぼくの推理である。ガウランドは一八七五年に立山と焼山を登ったと書いてから、

In subsequent years, from time to time, I made the ascent of several peaks, notably Yarrigadake, Jitake, Gorokudake, and Norikura, none of which had been previously ascended.

と書いている。はじめ、一八七三年に御岳二年後の一八七五年に立山、焼山と年号を記してから、つづく年に次から次へと登ったのであるから、槍ガ岳は一八七六年ではないのであろうか。すなわち明治九年である。そして、爺ガ岳、蓮華岳は一八七七年(明治十年)、乗鞍岳を一八七八年(明治十一年)とみたいのである。鳥水の明確な

文章に立向うだけの根拠に乏しいが、他の山々の記載が誤りである以上、槍ガ岳についてだって疑う余地があるように思える。それに、鳥水自身「アルピニストの手記」の中で、乗鞍岳の登山を明治十一年であるという説もあると述べていることにも、ぼくの推測は力づけられる。

また、ウェストンは地学協会の報告で、ガウランドは約二十年前に飛騨山脈を訪れており、ガウランドが登山活動を行なって以後十五年間は外人ではまず誰もかれの足跡を追ったものはいないだろうと述べている。ウェストンがこう書いたのは一八九五年であるから、ガウランドの活躍は一八七五年前後とみたい。そして、ウェストンがはじめて上高地に入って飛騨山脈にふれたのは一八九一年であるから、その十五年前は一八七六年である。ウェストンは日本の山々に入る前にガウランドから、その探検に関するノートをうけとっている。ウェストンは確実なことを知っていたにちがいないのである。

このことはもう少ししらべてみたいと思っているが、どなたか気づいた方があったら情報を頂きたいものである。なお、ガウランドのいう焼山は焼岳のことであると思う。ウェストンの書いているとほとんど同じルートをとってガウランドは登って、飛騨山脈の西側へ下ったと述べているからである。ウェストンが焼山に登ったという記録もないし、焼山が飛騨山脈に属するとは思えない。そして、この焼岳登山が一八七五年であるから、すでに上高地に入っており、槍ガ岳登山の偵察はすんだと思うのである。ここでも、一八七六年の槍ガ岳登山説を仮説として提出したいのである。なお、(三)で述べたラインの御岳登山は一八七五年であるから、外人としてはガウランドの一八七三年に次いで第二登となると思われるので訂正しておきたい。

聞き、当時日本の雪積期登山を目指し、ヒマラヤ研究にも着手していた慶大山岳部のあいだで、入手を熱望するものも多く、国分さん(東京・日本橋・国分商店現社長)を通じて購入する運びとなった。

フィルムは紛失を恐れて、小西六写真で二本コピーし、上映されたのはその一本で、撮影はキャプテン・ノエル。十数分間の上映時間ながら、われわれにとっては未知のチベット・ルートであり、マロリ、アービンが山頂に迫りながら行方不明となった同隊の作品は、英山岳会でも貴重なものといえる。事実、三田氏は、エベレスト初登頂二十周年記録集会(一九七三年、インド登山財団主催)に持参、上映したところ、ハント氏も「まだ見ていなかった。感激した」と三田氏の手を握ったといわれた。

「積雪期北アルプス初縦走」は山崎安治氏が解説された。大正末期、資産家伊藤孝一氏が計画した薬師岳、双六、槍の初縦走の記録で、伊藤氏はアイゼン、ピッケルも一流のものを使用、一万数千フィートのフィルム(33ミ)を荷ぎ上げ、専門の活動写真家を同行して撮影したのが国初の山岳記録映画である。

このフィルムは十年まえ毎日新聞名古屋本社カメラマン、上田竹三氏が二千フィート、上、下二巻にまとめた。三月NHKが放映し

たものは、この二巻を編成し直したもので、今回上下両巻そろって紹介される運びとなった。

「伊藤氏は大正十二年十一月からすでに現地入りし、いわなの手づかみ、かもしか射ち、とうふ作り(山崎)と、登山記録もさることながら、駒数の違う当時の活動写真」にあらわれる登山生活に館内は爆笑に湧いた。

大正十年といえ、故松方三郎氏が中房温泉から冬の燕岳スキー登山を行ったのを皮切りに、日本は厳冬期登山に目覚めた時代であり、このことと英エベレスト登山との登山レベルの比較を目のあたりにしたわけである。集会委員の配慮もうかがえた。

(片山全平)

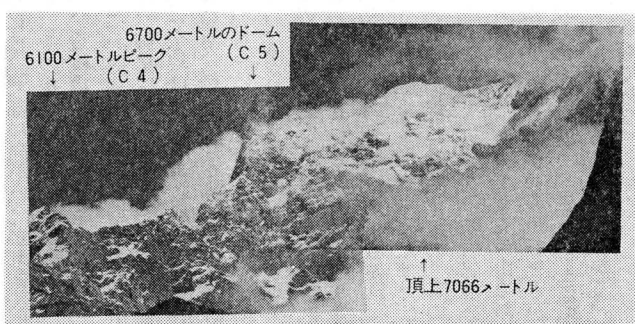
ドゥナギリ・北稜からの登頂

—学生部ガルワル・ヒマラヤ登山隊報告—

牧野内昭武

学生部のガルワルヒマラヤ登山隊派遣に際しては、たいへん多くの方々に御援助、御協力をいただきました。本当にありがとうございました。おかげさまで、私をのぞく全隊員六名が未踏の北稜からドゥナギリ峯(七〇六六メートル)

の頂上に立つことができました。ところで、私達のパーティーを知る人は、どうも十人中九人までが心の中ではあいつら登れっこないと思っていたフシがあるので。例えば、羽田へはたたくさんの方が見送りに来て下さったのですが、「登って来いよ」と元気づけてくれた人は一人もいなかったのです。それどころか、どれを見ても心配そうな顔ばかり。派遣部長の浅田治男理事からして「登れなくてもいいから、とにかく無事に帰ってくれ。たのむよ」とそれはもう哀願に近く、どうも、もう



売場ご案内

最新入荷の本

- 中近代日本登山史(安川茂雄)限定版12,000円
- 中牧場の星(串田孫一)限定版12,000円
- 中岩燕VI(麻布学園山岳部)3,600円
- 中荒島の冬(福井山岳会編)1,100円
- 中山の同人誌雪苞沓(ZUNBE)1,000円
- 中北の山統編(伊藤秀五郎)2,700円
- 中山を見る日(川崎精雄)2,900円
- 中グリンデルヴァルトの山案内人(サミュエル・ブラーヴァン=訳・井手貴夫)3,800円

特製本在庫ご案内 (お求めは直接お茶の水店へ)

- 中坂本直行画文集<雪原の足あと>25,000円
—原画花の絵(淡彩2号)付—
- 中望月達夫<遠い山 近い山>19,000円
- 中藤島敏男<山に忘れたパイプ>19,000円

茗溪堂 <山の本の売場>お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

一つ景気の良い出発風景になりました。また、帰国後も私達の隊が成功したことを知った方からは「登ったんだってなあ……」といかにもそれが意外であったかのように言われます。そんなわけで、私達のパーティーはひよつとすると大方の期待を裏切って不可能と思われていた登攀に成功した奇蹟的なすばらしい隊なのかも知れないぞ、いやそうに違いない、とこの頃は一人で得心していい気持ちになっていきます。いや愉快愉快。

私達が誰の目にもたよりないものに映ったのは当然で、隊長の私自身さてどうなることかと全く心

細かったのですから。それはこんなわけです。

まず、私達のパーティーは、当初、私の他に隊員・寺前紀夫、梅本実、大杉直彦、増田多喜男、竹中昇、磯野剛太、酒井敬士、医者・関章司の九人を予定していました。しかし、ナンダ・デヴィ縦走隊解散後そのままニューデリーに残り登山許可の取り付けその他現地交渉を一人で受け持ったが、残った磯野が、本隊の現地到着と同時に肝炎になってしまい残念ながら参加できず、また関ドクターは仕事の都合で九月末には帰国することになっていたので、登山活動は実質的に残り七人で行うことに

なりました。(シェルパ、ハイポーターは使わず)ところがこの七人は、私が十年も前に一度カラコルムに行った経験を持つ以外だれ一人海外の山を知らず、もちろんヒマラヤの水河も、四〇〇メートル以上の高度も全く初めてという初心者ばかりでした。しかも、いろいろな大学から集まった寄り合い所帯で、準備期間中に黒部別山、北岳、屏風岩と三度ほど合宿はしたのですが、誰が高所で強いのか、誰が岩や氷を十分こなせる実力があるのか、本当のところは互いにわからないという状態だったのです。

一方、ドゥナギリは、七〇六メートルとそう高くはないし、一九三九年にはすでにスイスのアンドレ・ロックにより東南稜より登頂されてもいるのですが、私達が登攀ルートに選んだ北面は全く未知の領域でした。資料といえ、シブトンのどこから撮ったのかよくわからない写真(いまでもよくわからない)とナンダ・デヴィ隊より借用したダランシパスからの北稜上部の写真だけで、それによると北稜の六一〇メートル・ピークから先はするどい岩稜が六七〇メートル近くまでせり上っており、この部分が相当に手ごわそう。六〇〇メートル以上でかなり高度な岩登りをしなくてはならないぞと覚悟は決めたが、ガンナクイ氷河からそこまでに関し

ては一体登攀可能なルートを見つけられるかどうかも見当がつかないというありさまでした。

また、当初インド登山財団と交渉を続けていたニルカンタ峯が、どたん場になってしまったため目的の山を急遽ドゥナギリに切り換えたといういきさつがあって、東京を出発したのがすでに九月に入ってからでした。これで登頂の頃にはジェットストリームが吹き荒れる心配が強くなったのです。

おまけに貧乏隊であったため、食料・装備ともにギリギリに切りつめ、食料は高所で食べる物も大半をインドで購入することとし、装備はテントからナベ、カマにいたるまで、ナンダ・デヴィ隊のお古をインド登山財団より借りることにしました。これらの調達うまく行くのか、また調達できたとしてもはたして使いものになるのか、これもまた心配のたねでした。

そんなわけで「ともかく行ってみなくてはわからない」と不確定要素ばかりの初心者パーティーはすっから居直って日本を出発したのです。

案ずるより生むが易し。インド登山財団やリエゾンオフィサーのチャア氏の親身の協力のおかげもあって、四日間のキャラバンの後、ついに九月二十一日にガンナクイ氷河、モレーンサイドのすばらしく気持ち良い牧草地にBCを設

立、登山活動に入りました。そしてこの登山活動は「予想通り」の困難を伴いながら始まりました。

まずドゥナギリ北稜が予想通り悪いのです。それはガンナクイ氷河まで三〇〇メートル以上の高度差を持って切れ落ちる長大な岩稜で、末端に至るまでずいぶんピナクル群で守られており、側面はいずれも岩壁、氷壁が氷河まで一気に落ち込んでいくというありさまで、さてどこから手を付けたものやら。隊員の若い連中が次々と体調をこわしたのも、予想通りでした。発熱、嘔吐、頭痛、はては落石による負傷まで。そしてジェット・ストリームの吹出しも予想通り十月七日にすでに始まったのです。

それでもやってみれば何とかなるもので、ルートの選定に右往左往したことを除けば、まあまあペースでキャンプは延びて行きまうです。登山活動の概略はこんなふうです。

九月二十四日、ガンナクイ氷河四五〇メートル地点にC1建設。

九月二十五日、C2へのルートを開くためアイスフォールのルート作中、突然ブロックの大崩壊に会い、すんでのところ四人が埋められそうになる。その後も崩壊がたえないため、ルートの再検討。BCのそばから北稜に食い込む大きなガリーに取り付くことに決定。これは今まで進めて来たの

と全く別のルート。明日はC1を撤収してふり出しにもどる。このルートは長く技術的にも難しいが危険は氷河ルートより少ないと考えられる。

九月二十八日、ガリーの途中に新しいC1建設(四五〇メートル)。

九月三十日、ガリーを抜け出たところに大きな雪のプラトーがあり、そこにC2建設(五〇〇メートル)。ガリーの最高部からプラトーまでが悪く、岩場と氷壁にザイル五〇メートルと縄梯子十メートルを固定した。

十月六日、C3建設(五五〇メートル)。C2から六一〇メートル・ピークまでは急峻な岩交りの雪壁。その雪壁の只中にわずかに張り張り出した雪のナイフリッジを切り崩してC3を張る。C2からそこまでザイル八〇メートルを固定。

十月十日、六一〇メートル・ピーク直下の雪の広場にC4建設。C3からふたたび雪壁の続きを登り(フィクスザイル三〇メートル)北稜上にとび出す。そこからは尾根通しに比較的容易なルートでC4。C4から先が前に写真で見た北稜上部岩稜帯となる。

十月二十日、悪い岩稜をついに突破し、六七〇メートル地点にC5(アタックキャンプ)を建設。この岩稜がつるつるのスラブ、垂直に近い氷壁、氷のつまったチム

ニーというように複雑で非常に悪く、連日苦闘を強いられて消耗。フィックスー〇〇メートル使用。これでアタックの目的が果たした。

十月二十一日、竹中、大杉、酒井の3人が登頂。七時過ぎにC5を出発しドームを越えてからは問題ない雪の斜面で早くも正午には頂上に達した。風強し。

十月二十四日、第二次アタック隊の寺前、梅本、増田登頂。牧野内はC5建設後、十二指腸潰瘍が悪化したため登頂を断念し二十三日にC4からBCへ下山。

十月二十五日、撤収。

とまあこんなわけで、意外にも登ってしまったというわけです。しかし一方では、三〇〇メートル用意したフィクスザイルが足りなくなつてポーターに下の部落まで麻縄を買いにやらせたり、ブロックの崩壊で埋められそうになったり、ルート作中にトップが滑落したり、大切な装備がいっぱい詰ったザックを六〇〇メートルの稜線から落ちてなくしてしまったやつがいたり、最後は時間切れと、一日を争う競走になったりで、気の小さいリーダーは一時も気の休まる間がなく、ついに最後になって神経性の十二指腸潰瘍が爆発してしまったというおそまつな事態も発生しました。

天候にたいへんめぐまれたことと、パーティーのチームワークが予想に反してたいへん良く、一人

日本山岳会会員による山岳絵画展

主催・図書委員会

日時 昭和52年2月28日～3月5日(6日間)

場所 東京・日本橋 丸善画廊

出品申込み締切日 昭和52年2月1日

備考 山岳画即売展。価格は当

一人のメンバーが個性を生かしそれぞれの役割に応じて最後までがんばり通したことが成功の直接の原因だと思えますが、全部をひっくるめて言えば、ともかくついていた、という一言につきます。

山岳会の若い連中が育って行くためには、今度のようなパーティーがどんどん出かけ高い山の経験を積んで来ることが望ましいのではないでしようか。ただし、リーダーは神経性潰瘍になるような小心者でなく、もっと神経の太い肝っ玉のすわった人物でなくては困ります。

アフガニスタン

から

泉 久恵

みなさまお元気ですか。出発に際しましては、皆さまの暖かいお志、大変ありがとうございます。カールに着いてもうすぐ二

委員会に一任願います。

なお、出品ご希望の方は当委員会まで一報下さい。出品は油絵、水彩画、水墨画、スケッチに限ります。ふるってご参加下さい。

カ月になるうとしています。

カール市内は周囲を山に囲まれ、その山々は到着したときはまだ真白でしたが、今はかなり雪がとけて地肌をみせてきました。それでも街中のココロラ売り屋台の上に雪がのせてあるところをみると、かなり近いところでも雪が残っているものと思われ、遠くの山はいい形をしていて、登りたいなあという気分にはせられず。

さて数年ぶりに大学生活に戻って、現在カール大学の外人コースでダリ語の勉強中です。授業は毎日あり、美しい(もちろん女性)先生がなかなかきびしく、宿題も出ます。作文を毎日七、十篇つくるのです。ダリのアルファベットも知らなかった私には、かなりきびしいコースですが、最近やっとアルファベットは書けるようになりました。毎日、チャドルをかぶった女性とともに市内バスで学校に通い、

時間が空いている時は、英語の出来る高校生にきてもらって会話の練習です。チャドルの女性がバスの車掌(全員男性)と口ゲンカをしているのを聞き分けられるようになればどんなに面白いかと思っています。

星間の気温は三〇度を越える日がつづいています。夜は一五～一八度Cまでさがり、気温の差はかなりはげしいものです。毎日、カバ(羊の焼肉)を食べているのですが、こちらにきてからかなりスマートになり、持参した衣類が大きすぎて困っています。

今日は宿題が終りましたのでこのお便りを書いていきます。また明日は、朝八時一五分から授業です。一九七六・四・二四(図書委員会宛)

上高地山研51年度

報告

上高地の日本山岳会山岳研修所は、11月7日に閉所、51年の利用者数がまとまったのでご報告します。51年は、前年より利用者がふえ、運営費50万円と利用料収入で、収支はとんとんになりました。ただ、8月に利用者が集中しているの、なるべくそれ以外の月のご利用をおすすめします。みなさまのご協力に厚く御礼申

しあげます。

・51年度利用者総計 六三五名

(50年度総計五八九名)

・51年度月別利用者数(会員のみのみ)

5月23名、6月22名、7月51名、8月59名、9月11名、10月39名、11月7名。

・総収入 一、一〇一、八七〇円(50年度 九四八、九五六円)

(山研委員会)

宝剣岳で雪崩勉強会

遭難対策委員会
指導委員会

例年やっております雪崩シンポジウムに代るものとして、昨年は八月末から毎月一二度、金坂一郎氏を中心に、ごく少人数、アトホームな雰囲気の中で雪崩勉強会をつづけました。

(一) 雪崩発生機構

(二) 雪崩判断の諸条件

(三) 雪崩事故における人間要素

(四) 雪崩遭難の予防

(五) 事例研究

の順序で進めているところですが、その一環として次の日程で「現地勉強会」を計画しています。

日程 2月17日～20日 三泊

場所 宝剣岳周辺(小屋泊り)

往復マイクロバスが利用出来、

ただいま、若干の空席があります。参加ご希望の方はどうぞお気軽に本会ルーム宛お申出ください。な

お、宝剣岳の帰途、入笠山麓富士見高原にある会員の別荘で一泊し、こん親会を開く予定です。(三渡)

藤島玄氏叙勲

祝賀会

越後支部

七十年余の人生を山登り一筋に生きてこられた藤島玄氏が昭和51年、勲六等単光旭日章を授与され、その祝賀会が、昨年十一月二十八日、新潟駅前東映ホテルでおこなわれた。

東京から望月副会長、名古屋から小出久子、近藤智津子、山形の岡部みち子、会津から関野重政、小椋利雄の諸氏らも参加、参会者は百余名となつて盛会だった。

斎藤平七氏は、開会の挨拶で、藤島玄氏の新潟県内の山開拓の功績を披露、叙勲が遅すぎた感があると述べ、望月副会長は、戦後の物資難のとき、山岳会の会報を東京で印刷はおろか用紙の入手も出来なかったのを、一人で発行を引きうけた、新潟で印刷、発行を継続してくれた、それは日本山岳会の記録に輝いた功績で、本日、勲賞以上に価する、と隠れた業績を紹介。その後も祝辞が相つぎ、祝宴に移ると、飲みかつ語り、唄が出て、いつはてるともない宴が玄さんの山旅六十年の叙勲をお祝いした。

(鈴木敏雄)



ルーム日誌 (51年11月)

- 1日(月) 集会委員会
2日(火) 指導委員会
5日(金) 評議委員会、理事会
8日(月) 集会委員会
9日(火) 指導委員会 (富士山説明会)
10日(水) 第三四六回小集会「パルトロカンリ登頂報告会」
11日(木) 雪崩研究会
12日(金) ナンダ・デヴィ委員会
15日(月) 集会委員会
16日(火) 指導委員会 (富士山説明会)

- 17日(水) 三水会
18日(木) ルーム委員会
22日(月) 集会委員会
24日(水) 雪崩研究会
25日(木) 婦人懇談会、図書委員会
26日(金) 山研委員会
29日(月) 集会委員会
30日(火) 山岳・会報委員会、第三四八回小集会「パミール報告会」
今月の来室者四二五名

会員異動 (51・11)

- 退会者
七一九五 中島 公
支部変更
五四八〇 大野 正子 その他
物故者
五一六一 青木 昭三 (51・4・27)
終身会員
四三六六 神原 達 (51・11・20)
除籍取消
六七七四 ジョン・ジー・デイ
五十年除籍者
四三八九 三宅 修
名義変更
四九三〇 榮 原太郎
永年会員
五六 神津 得一郎 (51・12・4)
九五七 柳澤 悟 (51・12・4)
九六九 佐々 保雄 (51・12・4)
九七六 額田 敏 (51・12・4)

ヒマラヤを語る会

日時 2月26日(土) 午後2時
8時

場所 東京・新宿副都心新宿住友ビル47階住友会議室

内容 ヒマラヤの動向/入山事情/実践報告/気象/シエル

パ・ポーター事情/遠征財務/速攻登山/図書/七〇〇メートルに登るには

司会 原 真 (日本山岳会高所登山委員会担当理事)

主催 日本山岳会高所登山委員会/同集会委員会

・出席希望者は早急に日本山岳会事務局へご連絡ください。

51年度新入会員オリエンテーションのお知らせ

日時 3月26日(土) 午後2時
6時

場所 日本山岳会ルーム(予定)

*6時より親睦会の予定。詳細は日本山岳会事務局へ。

昭和五十二年一月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一
利根川商事(株)さくらビル

発行所 日本山岳会

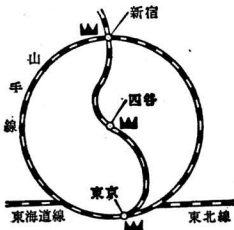
発行者 今 西 錦 司
編集代表 大 森 久 雄

(813)二二八六(代表)
振替口座東京三二四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技 報 堂

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●買いやすい
山の店●北へ来たたら
山の店●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

かたるぐシンティ
でんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



山の本

新刊

新刊

新刊

山日記

一九七七年版

日本山岳会編 A六ボケット判 定価九五〇円
山日記をつけよう／装備／気象／医療／新稿・
日本三百名山(案)：他■プレゼントカード付

山を見る日

川崎精雄 A五判三四八頁 定価二九〇〇円
淡い山登りの世界を綴った『雪山・藪山』の
好著に続き、著者の眼はさりげない紀行や随
想の中で、自然のもつ美しさや、さらに絵画
や音楽、人や書物についても幅広くいつきあい
を味わい深い文章でわれわれに示してくる

北の山続編



伊藤秀五郎
菊判 三三六頁
箱入フランス装
定価二七〇〇円

名著『北の山』以後に書かれた多くの文章の
中から、紀行・登山史、論説・随想・エッセ
イ、人に関するもの、自然保護というよう
に選択分類した。装釘、カットは坂本直行氏。
■主な内容／冬の十勝岳／琵琶湖川上流の
山々／『北の山』の精神的系譜／北海道の熊
の話／無言の対話／自然への回帰／哲学者の
旅／大島亮吉君を憶う／旅人としての田山花
袋／小泉信三さんの書簡／自然と人生：ほか

■出版目録送呈

■お買上げ、ご注文は最寄り書店でどうぞ

茗溪堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1 電話03-291-9442 振替東京8-24723